
未来 + 異世界 + 俺 = 結婚

倦埜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来＋異世界＋俺Ⅱ結婚

【Nコード】

N6377T

【作者名】

倦埜

【あらすじ】

平凡な高校生、倉肩信次は、4月28日、空から降ってきた「マオ」と名乗る女の子と出会う。

その女の子に「結婚してください」言われる。

信次がマオを、つれて家に帰ると、そこには、見知らぬ女の子「ミク」がいた…。

全30話

(誤字、脱字が多いと思いますから、誤字、脱字を見つけた時は遠

慮なくコメントしてください)

人物紹介（時間のある人だけ読んでください。大したこと書いてませんから）

話が進むたびに増えていきます。

人物紹介（時間のある人だけ読んでください。大したこと書いてませんから）

くらかたしんじ
倉肩信次

- ・一応、主人公
- ・身長173cm体重65kg
- ・男
- ・一人称は「俺」
- ・めんどくさがり
- ・短髪の黒髪
- ・17歳

マオ

- ・メインヒロイン その1
- ・実は未来人だったりする（そのうちエピソードを書きたいと思います。）
- ・天然、デレデレ
- ・身長160cm体重は…女の子なので伏せておきます。
- （設定するのがめんどくさかったわけじゃないです。）
- ・女
- ・黒髪ロング
- ・胸は中の上
- ・本名はマオ＝アルタチカ
- ・一人称は「私」
- ・17歳

ミク

- ・メインヒロイン その2

- ・異世界人（こっちもそのうちエピソードを書きます。）
- ・ツンデレ

・身長165cm体重は…「何言おうとしてんのよっ!」「…だそう
です。」

・女

・茶髪ポニーテール

・胸は中の下

・実は木ノ原美樹（木ノ原美樹）の義妹

・本名は木ノ原ミク。でも美樹に拾われる前は、ミク・ティニアル
・異世界で信次に惚れていたようです。

今の世界でも惚れ…「信次のことなんか好きじゃないんだからっ!」
…だそうです。

・一人称は「あたし」

・17歳

宇治川ユウ（うじかわゆう）

・ツンデレ（?）

・マオの監視役として現代に来た未来人…らしい

・女

・口癖が「〜です。」

・生意気、世間知らず、毒舌

・胸は下の下

・サブヒロイン

・身長146cm体重4じゅ…「チェストオ!何言おうとしてるの
です!」

・人をけなすときは、「ボンクラ」という

・信次のことを「ボンクラ」と呼ぶ

・一人称は「私」

・14歳

美間坂あげは みまさかあげは

- ・ 信次の幼馴染、幼いころから信次のことが好きだったようです。
- ・ 少しヤンデレ、クールデレ
- ・ 女
- ・ 胸は下の中
- ・ サブヒロイン
- ・ 身長152cm体重は…女の子なので伏せておきます。
- ・ 口癖が「…。」
- ・ 金髪ぱつん、いつも白い帽子をかぶっている。
- ・ 一人称は「私」
- ・ 17歳

越後波雪 えちごなみゆき

- ・ 信次の幼馴染
- ・ 運動神経が良く、筋肉質
- ・ 身長185cm体重72kg
- ・ モテるが恋などは興味ない
- ・ 一人称は「俺」
- ・ 男
- ・ 18歳

小奢一閃 こせりいっせん

- ・ 信次の幼馴染
- ・ 女好き、かわいそうなキャラ、下ネタ要員
- ・ 男
- ・ 身長176cm体重63kg

- ・一人称は「ぼく」
- ・最近、キャラ崩壊
- ・17歳

みなしだれい
三梨田零

- ・転校生
- ・一人を好む性格
- ・男
- ・身長180cm体重64kg
- ・一人称は「俺」
- ・過去に高校で暴力事件を起こした。
- ・17歳

にいぞのりよつか
新園涼華

- ・生徒会長
- ・女
- ・一人称は「私」
- ・信次のファーストキスの相手
- ・身長174cm体重：女の子なので伏せておきます。
- ・胸は上の上
- ・黒髪ロングポニーテール
- ・18歳

くらかたあしな
倉肩芦菜

- ・信次の妹
- ・毒舌
- ・レズツ気満載

・ 15歳

木ノ原美樹きのの はらみき

・ 孤児だったミクを拾った人

・ この人も異世界人

・ 21歳

信次の義母

・ 本名は倉肩美野里くらかたみのり

・ 信次の実の親ではなく、信次の叔母おば

・ 37歳

信濃弘しなのひろむ

・ 男

・ 三梨田の腕を折った

空から降ってきた女の子

4月28日青春時代真っ盛りな高校3年の俺はいつもの様に帰宅していた。

「あーあ、彼女欲しいなあ。」

そんなことをつぶやきながら俺は空を見上げた。

「ん？」

何か影が見えた。

「あれは…人か？いやいや、人が降ってくるなんてありえないだろ。」

そう思ったが、その影は俺のほうに向かって落ちてきている。

「おいおい、なんで俺のほうに落ちてくんだよ！」

俺は逃げた。何かの影から。さっきの場所から100？程走った。

「ふう、ここまで走れば、大丈夫だろ。」

振り返って、見えた光景を見て、俺は啞然とした。

「嘘…だろ…。」

さっきの影がもう、すぐそこまで来ている。

「た…たっ…助けてくださいいいいいい！」

今ならさっきの影が鮮明に見える。

その影の正体は、「人？…それも女の子？」

「うおおあ！」「いやっ！」「ドガッ！」

凄い音がした。その音の2秒後ぐらいに、嫌な音がした。

俺の腕から「バキッ」という何かが折れたような音が…。

「うっ！ぐうっ！痛ってえ！」「だ…大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけ…」俺は言葉を無くした。

そこにいたのは、身長は俺より小さくて、

黒髪ロングで言葉を無くす位かわいい女の子だった。

「えっと…すみません。どいてもらえないでしょうか。」

俺がそう言ったのは、俺に女の子が覆いかぶさるようになっていたからだ。

「あっ！す…すみません。」この女の子が立った後に俺も続けて立った。

「……。」女の子が上から落ちてきたことがないので、何と話しかければ良いか、わからない。

「あの…。」幸運なことに向こうから話しかけてきてくれた。

「私…人探しをしてるんですけど…倉肩信次くらかたしんじって人知っていますか？」

「俺だけど…何か用？」「えっ？あなたが！？」

「まあ、そうだけど…。」「えっと、あの、その、えーっと…」

「？」「けっ…結婚してください…！」

「……………えっ？……………」

4月28日、この日が俺の運命を変えた日だった。

もう一人の婚約者（前書き）

二話

もう一人の婚約者

「けっ…結婚してください…!」「……………えっ?……………」
それは、突然のことだった。

「今、結婚って言った?」「はい。」

「俺、まだ高校3年なんだけど…」「卒業するまで待ちます。」

「で、君は何歳なの?」「17歳です。」

「…えっと…ちよつと状況を整理させて。」「は…はい。」

「ちよつと何個か質問するけど…いい?」「はい。」

「結婚ってどういうことか知ってるよね。」「はい。」

「じゃあなんで俺に結婚してくださいって言ったの?」

「えっとそれは…未来のあなたに頼まれました。」「え!?!」

「未来の俺…?」「はい。」「…ってことは君は…未来人?」

「…なんでわかったんですか?」「(この反応は本当っぽいな。)

「で、どうやって現代に、来たの?」「それは秘密です。未来になればそのうちわかりますよ。」

「じゃあ、なんで上から降ってきたの?」

「私が、時空移動したのが、高層ビルの21階で、その高層ビルはこの時代にはまだなくて…。」

「じゃあ、君の名前は?」「あっ!自己紹介を忘れていました。私は、マオ・アルタチカです。」

「外国人なの?」「国籍は日本ですけど、父がガナピア人なので。」

「ガナピア?聞いたことない国だな…。」

「あっ!この時代にはまだガナピアは出来てないのか…。」

「確かガナピアって国はなかったと思うけど…あ!?!」

俺は、嫌な予感がした。

「まさか、泊まる家も金もないとか…。」「はい。」
俺の予感は的中した。

「(どんだけずうずうしい奴なんだ…)」
「わかった。うちに泊めてやる。その代わり俺の妹にばれんなよ。」
「ありがとうございます。」

そんなこんなで俺の家の前にて…

「俺の部屋は2階だから俺がリビング行ってる間に上にあがって
よ。」「はいっ!」

「いくぞ。」「ガチャ」「ただいま。」
マオは作戦(?)通りに上の階にあがっていった。

俺はリビングに入って、お茶とコップを持って上の階にあがって
いった。

俺がドアを開けるとそこには、二人の女の子がいた…二人?

「その子、誰?」「えっ?信次さんの知り合いじゃないんですか?」

「はじめまして!。あたしは、木ノ原美樹このはらみきって言うねん。よろしく
っ!」

病院生活

「はじめましてー。あたしは、木ノ原美樹って言うねん。よろしくっ!」

「はじめまして。じゃなくて、なんでここに、いるんですか?」

「あんたが倉肩っちゅー奴かいな。えらい冴えない顔しとんな〜。」

何だ?この女、いきなり知らない人に向かって冴えない顔って言うとか、

どんだけ礼儀知らずなんだ?しかもなんで俺の名前を知っているんだ?

って言うか俺の質問は無視か?なんで大阪弁なんだ?

「まあ、あたしが用があるわけちゃうから、ほな、帰りますわ。

聞きたいことがあつたらあたしの後ろにおるミクに聞いてな〜。」

その女の後ろにはもう一人女の子がいたのに、今、気付いた。

その女の子は、茶髪ポニーテールで身長はマオより少し大きいくらい。

「べ…別にあなたに会いに来たわけじゃないんだからっ!!勘違いしないでよねっ!!」

こつこつという性格の人アニメで見たことあるぞ。こつこつという性格のことなんて言うんだっけ。

えーっと「そうだ。ツンデレだ。」

俺は心の中で言ったつもりだったが声に出ていたようだ。

「しっ…死ねえー!」「うぐあああああ!」

さつき嫌な音がした右腕にミクの手がクリティカルヒットした。

一日後……………

俺はとある病院の一室にいた。右腕に包帯を巻いていることから察してほしい。

そう、右腕を複雑骨折したんだ。原因はマオが落ちてきたときの、あれだが、

この骨折をひどくしたのはミクのパンチだった。俺の横には犯人の二人がいる。

マオは俺の看病をして疲れていたようで、俺のベットにもたれかかって寝ている。

ミクは俺の横でリンゴの皮をむいてくれている。

「ありがとな。ミク。」「べ…別にあんたの為にむいてるんじゃないんだからっ！」

あたしがたまたまリンゴを食べたかっただけなんだからっ！」

「はいはい。わかったわかった。」

ミクは顔を真っ赤にしながらリンゴを食べている。

「あげるわよ。言っておくけど、余ったからあげるんだから勘違いしないでよねっ！」

「ありがとな、ミク。」

俺は形がガタガタなリンゴを皿から取って、口に運んだ。

「うん。うまい。」「当たり前よ、あたしが切ったんだから。」

レスツ気のある妹

5月2日、この日は俺にとって喜ばしい日となった。

何故かと理由を説明すると、今日から松葉杖ではあるが、退院できるところからだ。

学校に行くのは正直だるいが、つまらない病院生活をのほほんとしていくよりましだ。

俺はそんなことを考えながら松葉杖をつきながら、出口に向かうと二つの影が見えた。

一つの影は、俺に大きく手を振っている。

「退院おめでとございまーす。」言わずともわかるだろうがマオだ。

「べ…別にあんたの心配をしたわけじゃないんだから、

マオにつれてこられただけなんだからっ！」

これも言わないでも分かるだろう。「じゃあ、帰るか…俺らの家に、

」

病院と俺の家との距離は100m弱なので徒歩で家に帰っている。

俺は歩きながらふと、考えた、俺はリア充なのだろうか？

「リア充だ！自分で分かってなかったのか！？」（作者の声）

今なんか、聞こえたような…まあいつか。

たぶん俺はリア充だ。今、横に女の子が2人いて、

片方の女の子にはプロポーズされた。

もう片方は…そういえば、なんでミクは俺のもとに来たんだ？

まあ、その話は家でしよう。って言うかももう家じゃねえか。

俺たち三人は、いつもの手順で二階に上がり、俺の部屋に入った。

「なあ、ミク。いきなりだが、お前が俺のもとに来た理由って何だ？」

「！…それは…。」

明らかにミクの表情が変わった。

「ちよつと、マオ席外してもらえる？」 「？…はい。」

マオが出て行ったあと、ミクが、こう続けた。

「PWのあんたに頼まれたの。」

「信次さんこれはちよつとピンチです。「ドアの前には、マオともう一人、女の子がいた

「PW？」 「parallel worldパラレルワールドの頭文字をとって、PW、
わかった？」

「parallel worldって何だ？」

「今でいう、異世界よ。あんたホント頭悪いのね。少しは勉強したらどうなの？」

「誰かさんのせいで勉強ができなかったんだよ。」 「わ…悪かったわね。」

「話を戻すけど、異世界のあんたが死んじゃって…あたしは異世界のあんたが好きで、諦められなくてこの世界のあんたにその…告白をしに来たの！」

だから…そのえつと…とりあえずあんたはあたしと結婚しなさい！

「んな…！」

すいません。俺、やっぱりア充だわ。

「なあクソ兄貴。このカワイイ子誰だ！？」

鼻息を荒くして入ってきたのは俺の妹だった。

レスツ気のある妹（後書き）

すみません。パソコン壊れてたんで、更新送れました。

久々の学校 前編

「なあクソ兄貴。このカワイイ子誰だ!？」

しまった!マオたちのことが妹にばれてしまった!

「えっと、だな、拾ったんだ。」おいおいおい、何言ってるんだ俺! テンパリすぎだろ!

「まさか…誘拐?」妹が俺を軽蔑の眼で見る。

「お母さん。兄貴が誘拐し…。」やめろーおおおお!俺が社会的に死ぬだろーが!」

俺は妹の口を無理矢理ふさいだ。妹はその手を払いのけて、

「お母さん。ついに妹にまで手を出し…。」わかった、わかった。全部話すから!」

「…と、まあ、こういうわけだ。」

「こんな華のない顔してる兄貴が、こんなかわいい子たちに告白されるわけないじゃん。」

「華のない顔って言うな。」「兄貴。嘘はエイプリルフルにつくもんだぞ。」

「嘘じゃねえよ。」「ホントだって証拠はあるの?」

「マオ、あるか?」「特にこれといった証拠はないです。」

「じゃあミクは?」「特にないわね。」

「お母さん。兄貴が誘拐して身代金を用意しろって、その娘たちの両親に電話を…」

「だからやめろ おおおおおおおお!」

妹の紹介が遅れたが、妹の名前は、くらかたあしな倉肩芦菜だ。

レズッ気満載だ。身長は俺より低く、胸はツルペタ。

俺は何とかして妹にこのことは誰にも言わないようにと、約束させ、部屋を出ていかせた。

「あっ！そうだ。俺がいない間、飯とかどうしてたんだ？」

「その引き出しにあった三万円を使ってやりくりしてたけど……」

「……………え？」俺はあわてて引き出しを開けた。

そこには……

五十円玉が一枚と一円玉が二枚入っていた。

「嘘……だ……ろ？」「キッチン使わずに四日で3万円で過ごしたのよ！
もっとお金を置いていきなさいよ！」

「俺の……俺の修学旅行の代金があああー！！！」

俺は京都に行けなくなった。

……翌日……

「ふうー。久々の学校かー。」そんなことをつぶやきながら俺は家を出た。

「よっ！おせーぞ。信次。」こいつは、えちこなみゆき越後波雪小学校の時から友達だ。

身長は俺の1・3倍ぐらいだ。チャラくなくて、結構いい奴だ。

「早く…。」この子は、美間坂あげは^{みまざかあげは}。不思議系美少女。クラスでひそかなファンがひそかと呼べないぐらいいる。身長はマオより低い。

「じゃあ行きますか…。」「ちょっと待ってよ！ぼくの紹介は？」はあ。こいつは、小奢^{こおしりいっせん}一閃。

「じゃあ改めて行きますか…。」「今ので終わりなの!？」
ちっ！身長は俺より少し高くて、性格は、良く言えば、元気。悪く言えば、うるさい。

くそっ！一閃の紹介に4行も使っちゃった。

「ぼくの扱いひどくない?」「これからもっとひどくなります。」

作者の声)「ええ!？」

久々の学校 前編（後書き）

すいません。歯切れの悪いところで終わってしまいました。

一閃の紹介に四行も使ってしまったからか…。

一閃の出番減らすか…。

「お前たちの為だよ！（作者の声）」

右腕を骨折していたのでノートはあげはにとってもらった。

「起立、礼。」「はいっ。さよならー。」

さて、学校も終わったし面接に行くか。

俺たち四人は面接に受かり、バイトに全身全霊を注いだ。

俺は疲れ果てた体を何とか動かし家に着いた。

俺は二階に上がり、部屋のドアを開けた。

「ただいま。いないぞ？ 芦菜の部屋か？」

俺はとりあえず汗まみれの体を洗ったので、風呂に向かった。

俺が脱衣所のドアを開けると、マオとミクがいた。

「…きゃあああああああ！」「死ねええええー！」

「あんまり大声出すな！ 近所迷惑だ！」「とりあえず出て行け！」

ミクの投げたドライヤーが、顔面に直撃した。

俺はミクに追い出された後、リビングで写真を見ていた。

「あの事故さえなかったらなあ。」その写真は俺と芦菜と両親がわ

らっている写真だった。
俺の目から、涙がこぼれていた。

涙の理由

俺は淡路に家族と共に旅行に行っていた。ちょうど橋の上を渡っていたところだった。

その瞬間、騒音が俺の耳に響いた。

キキイイイイイ。ガガガガガガッ！ゴッ。ドボッ。

その時、俺は何が起きたか分からなかった。ただ、周りがゆつくりに進んでいるように見えた。

これが交通事故だと気付いたころには、もう、水の中だった。

「俺はここで死ぬんだなあ。」と、思ってから意識を失った。

気がつくと、俺は担架に乗っていた。サイレンの音が耳に飛び込んできた。

「俺は生きているのか？」何も分からないまま俺は救急車に乗せられた。

俺が救急車に乗った後、もう一つの担架が違う救急車に乗って行くのが見えた。

そこから、おれはまた、気を失った。

次に目を覚ました場所は、病院のベッドの上だった。

起きた瞬間はどこにいるのか分からなかった。俺の隣のベッドには芦菜が寝ているのがわかった。

俺は、看護師に、「俺の両親の病室はどこですか？」と聞いた。

看護師さんは少しうつむいて、俺に目を合わさないようにこつ言
った。

「つらいかもしれないけど、これから話すことは真実だからよく聞
いてね。

あなたの両親は…

溺死したの…。」

「えっ？」

俺はその瞬間、頭が真っ白になった。

俺の…親が…死んだ…？さっきまであんな元気だった父さんと母
さんが…？

俺は泣いた。ただ泣いた。泣いても、親は戻ってこないとわかっ
ていたが涙が止まらなかった。

しばらくして、俺たちは、叔母の家に引き取られることになった。
そして今に至るわけだ。今では叔母のことを俺と芦菜は「母さん
と呼ぶようになった。

「父さん…母さん…。」「何泣いてんのよ。」「どうしたんですか
？信次さん。」

「いや…何でもねえよ。」「でも涙が出るわよ。」「これはあれ
だ…あくびした時に出たやつだ。」「

俺は急いで涙をぬぐった。

マオたちに、無駄な心配をかけさせるわけにはいかないからな。

「？」

「ただーいまー。あれ？誰？その子たち？」

「これはその…。」

「洗いざらいすべて話しなさい。」

「…と、まあ、こういうわけで、この子たちがいるわけだ。」

「分かった。」

「信じてくれるのか？」

「自分の子供を信じられない親なんて親失格よ。」

「ありがとう。母さん。」

修学旅行 一日目？（前書き）

フラグ回収も終わったし、新しい話に進みます

修学旅行 一日目？

5月5日、今日は、待ちに待った修学旅行。

バイトでマオたちの生活費も稼げたし心配事は何もなし。と、思ったかった。けど、現実はその甘くはなかった。

第一の原因は、眠い！バイトの疲れが残っていて、なおかつ、夜にはミクたちがギャーギャーうるさいったらありやしねえ。

「何、一人で旅行行こうとしてんのよ!？」

「私たちを置いて行くんですか!？」

そこに母さんが入ってきて、

「大丈夫！マオちゃんたちも行けます！」母さんの手には

「入学手続き」と書いた紙が握りしめられていた。「ハア!？」

というわけで、マオたちが俺と一緒にバスに乗り込んでいます。

某、何とか条さんの台詞を使わせていただきます。

「不幸だあああああああ！」

「ねえ。どこから来たの?」「日本人?」「かわいいね!。」

「好きな食べ物は?」「ぼくと結婚してくれない?」「友達になるっ!」

マオたちはすっかり人気者の様だ。俺は前のほうで見ないふり見ないふり。

「どうしたんだ?信次?」俺の隣の波雪が声をかけてきた。

「波雪か…。あれがうちの居候だよ。」「あれがか…。なかなかかわいいじゃねえか。」

「波雪がそんなこと言うのって珍しいな。」「まあ俺は興味ねえけ

ど。」

波雪は恋とかにあまり興味がない。せつかくモテるのにもったいねえな。

「(かわいい…。新たな恋のライバル登場か…。)」

「あげは。何か言ったか?」「いや…。何も言っていない…。」

「そういえば一閃は?」「さっき『結婚してくれない?』って言うてたやつだ。

「出会ってすぐ結婚かよ…。」

「彼氏とかいるの?」

「彼氏って言うか結婚を前提にお付き合いしている人ならいるけど。(いますけど。)」

「。。。誰!?」「。。。」「信次よ(信次さんです)。」

俺は飲んでいたお茶を嘔き出した。

「倉肩信次くん。こっち来て話をしようか!」

殺気!? 男子生徒(波雪を除く)全員が俺に襲いかかってきた。

「10秒やる。念仏でも唱えてる。」

「一閃!? そんな鉄パイプどっから出したんだ!?!」

「10秒たった。殺す。」「バスの中で暴れたらいけねえだろ!」

「俺が許可する。」「運転手さん!?!」

「助けて生徒会長!」「面白そうだから見ておくわ。」「彼女は生徒会長の新園涼華さんだ。」

新園さんは生徒会長であるため生徒会長と俺は呼んでる。

黒髪ロングポニテで胸は上の上。身長は俺より高く、波雪より低いって感じた。

「ちよつと助けて。波雪!」「悪いが、力になれん。協力したら俺まで殺られそうだ。」

「じゃあ、あげは!助けてくれ!」「私という人がいながら、

ほかの女に手を出すなんて…。しかも二人…。私という人がいながら…。

私という人がいながら…。私という人がいながら…。私という人がいながら…。

「ちよっ…。あげはさん！？どうしたんですか！？」

「信次…。一緒に死のう…。」あげはは、カッターを取り出す。

「ちよっ…。あげはさん！そんなヤンデレキャラでしたっけ！？それはマジで死にます！」

この状況を乗り切るには、これしかない！

「あげは！お前のことが好きだ！」

「本当…？」アゲハの殺気はおさまった。

が、男子の殺気が二倍になった。

「…ぶっ殺おおおす！」「…」

男子の殺気より、遙かに大きい殺気を二つ、俺は感じた。

「信次。今のはどういうこと？」「信次さん。答えてください。」

もう一度、某、何とか糸さんの台詞を使わせていただきます。

「不幸だあああああああ！」

修学旅行 一日目 ? (前書き)

最近は思いつきで書くんで更新が早いです。

修学旅行 一日目？

俺の頬は、赤くはれていた。

前回の話を見てくれていた人は理由がわかると思う。

今は寺巡りとかいうめんどくさい事をやっている。

俺の行動班はマオとミクと波雪とあげはと一閃と生徒会長。

「何か俺らの班多くねえか？」

「仕方ないだろ。マオとミクがお前と一緒にいって言ったんだし。」

「それをマオとミクが言った時は、また男子に殺されるかと思ったよ。」

「お前も大変だな。」「まだ一閃が後ろでバットを持って禍々しいオーラを出してるよ。」

「まあ仕方ないだろ。その状況だぜ。」

俺の今の状況は、ミクに「別に手を繋いであげなくもないわよ。」と左手を握られ、

あげはに「私のこと本当に好きなら恋人っぽく腕組んで…。」と右腕を組まれ、

マオは「のど渴いたんですけど、お茶忘れましたから信次さんのお茶ください。」と

俺のお茶を間接キスで飲んでる。生徒会長が何もしてないだけマシなんだろうけど…。

一閃の気持ちも分からなくもない。

「お願いだから離れて。俺、殺されるかもしれないから。」

「「「いや。」」」

即答である。

「なんで？」

「信次さんは、私たちを置いて行くとしたじゃないですか。」

「気付きなさいよっ！この鈍感っ！」

「信次、私のこと好きって言ったよね…。」

…もう、お手上げだ。

一閃の殺気を感じながらも寺巡りは終わり、俺たちはバスに乗ってホテルに向かった。

「おおー。意外に広いなあ。」

ホテルは設備がきちんとしていた。

「そうだ。マオたちの部屋って…」「信次（さん）と一緒に部屋がいい（ですっ）。「」「」

「言うと思った。」「俺はため息をつく。俺の言葉の後にあげはと生徒会長が続いた。

「じゃあ私も…。「私もご一緒させてもらおうかしら？」

「ええ！？つてことは？（アルファベットが入ります）すか？」

「やめる。この小説が汚れる。」「次、下ネタ言ったら次の二話出番なしな。」

「すいませんした。読者の皆さま。」

「で、なんで本当に7人で1部屋なんだ？」

「これが生徒会長の権力よ。」

「でも布団が一組足りないみたいだが。」「波雪が的確な指摘を入れた。

「……………」(つまり、一組の布団で二人が一緒に!)「……………」
波雪以外の全員がおんなじことを考えていた。

「じゃあ私が倉肩君と一緒に寝るわ。」

「……………」ちよつと待ちなさいよ!(待ってください。)(…待って…。)

「……………」

「この部屋になったのも私のせいだから、その責任として私が。」

「私は、信次の幼馴染だから信次のことはこの中で一番分かっている…。だから私が…。」

「いや違います。私は信次さんと結婚します。」

「いつか同じベットで寝るときにその予行演習として私が。」

「私は…その…えつと…。」

「俺の権利は無視ですか?」

「じゃあ僕と寝るって言うのは?」

「……………」ありえない。「……………」

「じゃんけんする必要はねえよ。俺、座布団で寝るから。」

「……………」そうしよう。「……………」

「ミシッ！」「よしひびが入った！もうすぐだ！」
「oooooooooooooo おお！oooooooooooo」

「ドオン！ドオン！バキッ！」
えっ？今、バキッて言ったか？

「よしっ！開通だ！」oooooooooooo よっしゃあああああ！」「
oooooooooooo」

そこに女子の姿はなかった。

後から知ったことだが女子は俺らが全員温泉から上がった後に風呂に入る予定だったらしい。

その後、一閃をはじめとする男子は、先生にすごく怒られたらしい。

「馬鹿だな。」「俺と波雪は一緒に言った。

「なあ。お前って、マオとミクのこと、どう思ってた？」「波雪が俺に言った。

「何だよ、突然。」「いや、ちょっと気になってな。」

「波雪ってこういう話あんま好きじゃなかっただろ。」

「嫌だったら何も言わなくていいんだぜ。」「いや、聞かせてよ。」

「一閃も聞きたいのか？」「ああ。」

「なんつーか友達以上恋人未満って感じかな。」

「言っとくけど、あいつらは本気だと俺は思うぞ。」「ぼくも思うね。」

「お前、最終的にはどちらか一人を選ばなくちゃなんねーぞ。」

「別にあの二人じゃなくて違う人でもいいだろ。」「俺はお茶を口に含んだ。

「じゃあ、あげはか？」「俺はお茶を噴き出した。

「あげはは、かわいいと思うけど、俺なんかと釣り合わないだろ。」
「信次、わかってねえな。」
「第一、あげはが俺のこと好きかわかんねえだろ。」
「信次。」「何だ一閃。そんな真剣な顔して。」

「あげははお前のこと好きだよ。」

「……え?」「お前、分かってなかったのか?」

「冗談はやめるよ。」「冗談なんかじゃねえよ。」

「…いつからあげはは俺のこと。」「幼い頃からだよ。」

「まあ、その話は置いて。」

波雪が部屋のドアを開けると、マオとミクと会長とあげはがいた。

「いつから話を聞いていたんだ?」

「波雪さんは何で分かったんですか?」「足音だ。で、いつから話を聞いていたんだ?」

「倉肩君がお茶を嘔き出してからよ。」

「まあ、許すけど、人の話を盗み聞きするのは、いい事とは俺は思わないぞ。」

「越後君だっけ?ごめん。」「ミクが頭を下げる。」

「波雪でいいぞ。」「じゃあ、波雪、ごめん。」

「俺じゃなくて信次に言うことじゃないか?」

「信次、ごめん。…なんて微塵にも思っていないんだからっ!」

「はいはい。」

「ああ…。寝れねえな。」時刻は午前二時。

「信次も起きてるの…?」「あげはも起きてたのか。」

「信次…。向こうの部屋で気分転換に星を見にいこ…。」

「おう。行くか。」

「ありがとうな、あげは。」「何が…?」

「お前のおかげでこうして、修学旅行に來れてる。」

「私だけじゃ出来なかった…。」「でも、提案してくれたのはあげはだろ?」

お前が言ってくれなかったらここに來れてなかった。ありがとうな。」

…。「照れてるのか?」

…。「…っているの?」「え?」

「信次は私のことどう思っているの…?」

「かわいいとは思っよ、でも俺なんかじゃもったいないか?」

「波雪たちが言っただと思っけど改めて言っ…。」
私、信次のことが

好きなの…。」

「あいつら…。嘘じゃなかったのか。」

「ねえ、信次…。どう思っっているの…?」

「お、俺は…。「信次とあげはがいないぞ。いかがわしい事でもして
るんじゃないか?」」

「じゃあ一閃に見つかるよめんどくさいから、返事はまたいつかな
!」

「あ…。信次のバカ…。」

修学旅行 二日目？

京都に来てから、一晩が経った。

今日も、寺巡りというスケジュールだ。

「ここが清水の舞台かー！」 「一閃テンション高いな。何か思い出でもあるのか？」

「いや。言ってみただけ。」 「信次！おみくじ一緒に引きなさい！」
「信次さん！一緒に引きましょう。」 「信次…。行こ…。」
「じゃあ俺も一緒に行かせてもらおうか。」 「ぼくも行こっ。」

俺……………大吉

マオ……………吉

ミク……………小吉

あげは……………中吉

波雪……………大吉

一閃……………大凶

「よし大吉だったぜ。」 「私は吉でした。」 「あたしは小吉だったけど恋愛運がいいみたいね。」

「私は中吉…。良い方角は北西…。」

あげはは、あげはから見て北西の方角にいた俺に抱きついてきた。

「あつ！大吉だ。」 「大吉の割にリアクション薄いね。ところで俺の奴は…。」

大凶だ。」 「まあ妥当だな。」

「さて大吉を木にくくりつけに…」 「久々に京都に帰ってきましたよ。母上。」

「会長…?」「ああ。倉肩君。」「生徒会長ここに住んでたんですか?」

「まあね。倉肩君はどうしたの?」「生徒会長はおみくじ引かないんすか?俺大吉引きましたよ!」

「私はいいわ。あと大吉は持って帰ったほうがいいらしいわよ。」「そうなんすか。」

「…倉肩君、なんで私にはタメ口使わないの?」「なんか敬語使うのに慣れちゃって。」「じゃあ今からタメ口を使いなさい。」

「は…はあ…。」「それから私のことは、涼華と呼びなさい。」「は、はい。分かりました。生徒会長。」「生徒会長じゃなくて涼華。」

「分かりました。…涼華さん。」「タメ口。」「分かった。涼華。これでいいんですか?」「ん よろしい。私も信次って言うわ。」

「さて、おみやげでも買いに行きましょうか。」「涼華が言う。」

「そうするか。」「波雪が同意して、おみやげを買いに行くことになった。」

「涼華は何を買った?」「…ピクッ!」「」

「私は食べ物系かしらね。」「おれも食べ物系買おうとしてるんだよ。」

「一緒に買いましょうか。信次。」「…ピクピクッ!」「」

「信次さんちよっとこっちに来てください。」「マオとミクとあげはが俺をにらむ。」

「（俺、何か悪いことしたっけ？）」

「信次！なんで生徒会長のこと涼華って呼ぶようになったのよっ！」ミクが首を絞めてきた。

「いや。涼華がそう呼べって言ったから。」生徒会長との間に何があつたの…？」

首を絞められてるせいで気が遠のいていく…。「それは…ブクブク。」

「信次さん、泡吹いてますよ！」「こつなつたら生徒会長に聞きましょう…。」

「生徒会長！信次と何があつたんですか？」「ふふっ ひ・み・つ。」

「意味深な笑いですね。」

その後、俺は「おべ」を買った。マオたちは何を買ったんだろうか？

修学旅行 二日目？

俺がマオのお土産と一緒に選んでやっている和最悪の事態が起こった。

「キキイイイキキ！」 「バタン！」

「えっ…？」 今、何が起こった？涼華が黒い大型車に乗せられて……誘拐！？

「信次っ！！何してんだ！あの車を追っぞ！」 波雪の声で俺は我に返った。

「女の子はここに居ておいて！」 「警察に連絡してくれ！」
なんで涼華が狙われたんだ！？クソっ！

涼華視点……

「へへへへっ。成功かぁ。」 「ああ。この娘は確かにターゲットの女だ。」

「これで身代金何円もらえるだろうかなあ！」 「フハハハハハハッ！」「」

信次視点……

「今の車のプレートナンバーは！？」 「あの車プレートを付けてなかったぞ。」

「なんで涼華を狙ったんだ？」 「お前、知らなかったのか？会長は『新園グループ』の女社長の一人娘だぞ！」

「『新園グループ』って世界一大きな会社のある所だろ！？」

「ああ。だから社長の身代金目当てに誘拐したんだろ！」

そんなの俺は知らなかったぞ…。

涼華視点・・・

「離しなさい。この野蛮人!」「何だと!?このクソガキが!」

「今離したら罪を軽くしてあげるわ。」「お譲ちゃん。あんまり大人を舐めちゃあいけねえぞお。」

「クズのくせに生意気な口を利くのね。」

「お譲ちゃんには大人の怖さってもんを教えないといけないみたいだねえ。」

「暴力をふるうとさらに罪が重くなるわよ。」

「暴力じゃあないよ。君に大人の勉強をさせたいと思ってねえ。」

「(助けて。信次。)」

「パリン!」車のガラスが割れた。「誰だ!？」

「俺か?俺の名前は倉肩信次だ!」そこには鉄パイプを持った信次がいた。

「なんだ。ただの高校生か。」「お前一人で何ができるって言うんだ?」

「一人じゃねえよ!」「へっ!高校生三人と大人三人のどっちが強いと思ってるんだ?」

「とりあえず出てこいや。この人間のクズが!」「ああ!?なめてんじゃねえぞ!」

車から三人が出て行った。車から男が出て行ったあと私は何かに持ち上げられた。

信次視点・・・

俺はケータイを取り出した。「お前、警察に電話したらこの女が

「タダじゃすまねえぞ。」

「どの女のことを言ってるんだ？」「だからこの車に乗ってる…あれ、いな…「ガッ！」」

俺は一人の男が振り返った時、男の左腕をつかんでねじった。

「このクソガキが！」「させるか！」波雪と一閃も同じように男たちを身動きできないようにした。

そのすぐ後で、マオたちに呼んでもらったパトカーが来た。

俺たちは50分ほど職務質問された後、解放された。

その日の夜…

「せつかくの修学旅行なのに嫌な思い出がきちまったな。」

「そうね。じゃあ、いい思い出にするために信次にしたいことがあるわ。」

「なんだ？俺が出来る事なら何でもいいぞ。」「じゃあ。」

「…?!?!?!」俺は涼華にキスされた…。それは俺のファーストキスだった。

「これでいい思い出になったわ。じゃあおやすみなさい。」

修学旅行 最終日 ？

「そうね。じゃあ、いい思い出にするために信次にしたいことがあるわ。」

「ちょ、涼華！やめろ。」「何を？」俺が目を開けると涼華がいた。えっ……………今の…夢…？その時俺は身の危険を感じた。

「信次…。どんな夢見てたの…？」

「信次さん。夢の内容を事細かに教えてください。」

「信次！あんた会長と何してた夢を見てたのよっ！」

三つの殺気が俺に向けられる。

「波雪、助け「俺は助けないぞ。」」「じゃあいつせ「リア充は爆発しろ。」」

「涼華、助「信次、昨日の夜は私とあんなことをしたのに…。」」

「……………しーんじくん、あーそびましょ。」「……………」

と だち！？三人がおかしくなってる。涼華、火に油を注ぎやがった！

全然不幸じゃない 条さんの口癖を使わせていただきたいと思います。

「不幸だあああああ！」

というわけで、修学旅行最終日は、不幸なことからスタートした。

俺は今、バスに乗っている。俺の頭には三つのたんこぶが出来ていた。

「お前も幸福なのか不幸なのかわからねえな。」波雪が言う。

「痛い幸せかい？」「一閃、今、明らかにおかしい読み方をしたと思うんだが!？」

「何のことだい？」「まあ、この話は置いて、今日の日程は？」

「ラフティングだ。」「水着が痒めるううう。」

一閃の奴、すっかり下ネタキャラになっちまってる。

最初は狩 英考みたいなかわいそうなキャラだったのに…。

というわけで、俺は今、ボートの上にいる。

「ココ」1、2、1、2。「」

何が楽しくてこんなもん乗らなきゃなんねえんだ。と、最初は思っていたが、
乗ってみると案外楽しいもんなんだな。

「ココ」1、2、1、2、「」

「ココ」1、2、1、2、「」

「それにしても、絵になんねえ状況だな。おい。」

と思ったので、このシーンは大幅カットです。(作者の声)「

ちなみに、水着じゃなくて、ウエットスーツでした。

「くそおおおおお!!(一閃)「

俺たちはウエットスーツを脱いで、私服に着替えなおして女子を待っていた。

涼華が俺に手を振って駆け寄ってきた。

「信次、待った？」、「デートに遅れてきた人みたいだな。」

「そこは『君の為ならいつまでも待つよ。』でしょっ！」「なんでミクも乗り乗りなんだよ。」

「そういえば、マオは…？」「まだこっちは来てないみたいだけど。」と一閃が言った後、

「キヤアアアア！」マオの悲鳴が聞こえた。

「マオ！」駆け出そうとした俺を波雪が止めた。

「なんで止めるんだよ！」「女子更衣室だ！バカ！」

「とりあえず、あたしたちが言ってくるからあんた達は待ってなさいよっ！」

「頼んだぞ！」「任せて、信次…。」

マオの奴大丈夫か？心配だ。

二分ほど経つとミクが返ってきた。

「信次、

マオがいない！」

修学旅行 最終日 ? (後書き)

最近、涼華が独走してたので今度はマオのターンです。

修学旅行 最終日 ? (前書き)

そつえば信次、骨折してたよな…忘れてた。

修学旅行 最終日 ？

「マオ！どこだ！？」

「マオ！くそ！あいつ、どこ行きやがったんだ！？」

… 3分前 …

「あげはちゃん、会長さん、ミク、着替え終わったから、先に行っておきます。」

「分かったわ。」「マオ、信次たちに少し遅れるって伝えといてっ！」

「はい、分かりました！」

「（フフフフ、この間に信次さんとの距離を縮めておくのです。）

「その前にトイレに行っておきましょう。」

ミク視点…

「（マオったらあんなに急いでどうしたのかしら？）」

「信次との距離を縮めるためかもしれないわね。」

「会長っ！なんであたしの思ってること分かるんですかっ！？」

「乙女の勘ってすごいのよ。」

あげは視点…

「（私も乙女だけど、そんな勘は鋭くない…。まさか、私って乙女じゃないの…？）」

「大丈夫よ、あげはちゃんは乙女だから。」

「なんでわかるんですか…?」

「だから乙女の勘よ。あつ、信次だわ。」

「信次く待ったく?」

マオ視点…

「ハッ! みんなに先を越されたかもしれないです。」

「早くしないとみんな信次さんとラブラブなのに私だけ、取り残されちゃいます!」

「ガコツ。」私の足元の岩がはずれました。

「キヤアアアア!」

信次視点…

「クソ!どこだ!?!」

俺たちは三組に分かれてマオを捜索することにして俺は、ミクと一緒にマオを探している。

「信次っ!警察呼ばなくてもいいのっ?」ミクが言う。

「あいつは俺に助けを求めているはずだ!俺じゃないとだめなんだ!」

俺は落ちていたものを見つけて最悪の結果を想像してしまった。

「これって、マオの靴だよな。まさか、あいつ! マオ!」
横を見ると、岩が崩れていた。

「信次。これってまさか、マオが「大丈夫だ!あいつは生きてる!」
きつと…。」

俺はマオのことしか考えずに斜面を下っていった。

マオ視点…

「きゅあああああ！」「どンドン転がっていきます。

「ガコツ！」頭が岩にぶつかつたようです。

頭からいっぱい血が出てます。私、死んじゃうのかな？

「マオオオオオオオ！どこだああ！」

信次さん…私…意識が遠のいて…「ガクツ！」

信次視点…

「マオ！ふざけてんじゃねえぞ！かくれんぼはもう終わりだぞ！」

…信次っ！これって…血じゃない？

ミクが指差すほうを見ると、赤い血がべつとりと石についていた。

その横にはマオがいた。

「マオ！お前、死ぬんじゃねえぞ！」

「信次さん…ありがとう…。」

「黙れ！別れの言葉みたいなこと言ってんじゃねえぞ！」

「でも…でもじゃねえ！お前は俺と結婚すんだろ！？」

「（信次さん…。）」

俺はマオをラフティングの更衣場の前まで担いで行った。

そこでは、波雪たちとミクに呼んでもらった救急車が待っていた。

「早くこいつを連れて行ってやってください！」

「これはひどい！分かりました！急いで搬送します！」

「あと…俺も同乗していいですか？」

「分かりました。でも一人までなので他の人は同乗できませんよ。」

「行ってこい信次！」波雪が言った。
「行ってくる！」

「信次さん？」マオが目を覚ました。

「何も喋るな。マオ。」

「私、どうなっちゃうんでしょうか？」

「お前は死なない！大丈夫、俺が保証する！」その言葉に根拠などなかった。

「信次さん、最後にキスしてください。」

「最後じゃねえって言うってんだろ！そんなもの、生きて帰ったら何度でもしてやるから！」

「ホントですか…？」「嘘なんてつくかよ。」

「約束ですよ。信次さん。」そう言ってマオは気絶した。

俺が今いるのは、集中治療室の前だった。

集中治療室のランプが消えて、ドアが開いた。

「マオは！？マオはどうなったんですか！？」

「大丈夫ですよ。今は安静にしていますから、しばらくすると、病室に運ばれると思います。」

「良かった。」俺は安堵の気持ちに包まれた。

「信次さん。…ごめんな…さい！ヒクッ。ウッ。ウッ。」

「マオ。俺からも伝えたいことがあるんだよ。」

ありがとう。」

「信次さん……。信次さん……。ありがとうございます……。信次さん……
…ウワアアアア！」

「マオ、泣きたいときは泣いてもいいんだぞ。」

「ありが…とうござい…ます…。ヒツ…ヒツク。」

「マオ、約束覚えてるよな。」「えっ？」

「信次さん！？」「生きて帰ってきてくれたお礼だ。」

「信次さん！大好きです！」マオが抱きついてきた。

「ガラッ！」病室のドアが開く。

「信次…。何してるの…？」

「信次。昨日は私としたことは嘘だったの？」

「信次っ！あんた覚悟は出来てるんでしょねえ！」

「やめろお！」

「モテる男はつらいんだな。」「リア充は爆発しろ。」

かくして俺の修学旅行は終わった。

マオは、一日遅れて帰ってくるそつだ。

殺気が漂っているミクと一日を過ごすことになるのか…。
心配だ…。

ミクとデート(?)

「シーーーーー」

えっと…気まずすぎる…。

家には本当にミクしかいない。

マオは京都の病院で、芦菜は友達と遊びに行つて、母さんは残業、そして今日は日曜日、俺は遊びに行く約束をしてない。

…気まずい…。昨日あんなことがあつたしな。

「ミク。何か食べるか?」「…。」

「じゃあトランプでもするか?」「…。」

怖いよお。怒つた女の子つて怖いよお。

でも黙つてたらもつと気まずい。何か言わないと。

「じゃあどこかに行くか?」「…どこに?」

よし、反応があつた。

「じゃあ遊園地なんてどうだ?」「分かつたわ。仕方ないから行つてあげるわよっ!」

機嫌、治つたみたいだな。

ということ、今、俺たちは、最寄りの遊園地にいる。

これって俗に言う、デートつてやつか?

いつも仏頂面なミクの目がいつもの三割増しで輝いている。

ミクは俺が見ているのに気付くと、顔を赤くして、

「何よ、あんた!あたしを見て何ニヤニヤしてんのよっ!この変態つ!」

「ニヤニヤした覚えはないが…。」「元々そんな顔してんのよっ!

「この変態っ!」

「いつも見てる顔だろ?」「うっさいっ!この馬鹿っ!早く行くわよっ!」

何だかんだで嬉しいみたいだな。

ジェットコースターに急流下り、メリーゴーランド、ティーカップなどミクと色々満喫した。

やってないアトラクションはあと2つになった。

一つは、お化け屋敷

「信次、お化けやしき行くの?」「まあ、折角来たんだし、全部のアトラクション制覇しようぜ。」

「うん...。」「まさか怖いのか?」

俺が聞くとミクは顔を真っ赤にして、

「そ...そんなわけないわよっ!でも信次が怖いなら手を握ってあげなくもないわよっ?」

と言った。俺は、ミクの真っ赤な顔を見て、笑いながら、

「俺は手を握ってもらわなくてもいいぞ。」

「あたしが親切で握ってやろうと言ってるのに、拒否するなんて許さないわよっ!」

「はいはい。」

そう言っただけ俺はミクの手を握った。

お化け屋敷の中は全然制作者側の意欲が感じられない、ちっとも怖くないデザインだった。

こんな作りで怖がる奴、居るのか？

「信次、あんた、迷子にならないようにあたしの手をずっと握ってなさいよっ。」

怖がる奴…横にいたよ。

「ガタンツ！」という音が鳴って、鎧の騎士みたいな人形がゆっくり動く。

それにしても、ゆっくりだな。例えるなら、老人の歩くスピードくらいだ。

しかも、機械音が丸聞こえ。こんなんで怖がる奴…

「きやあああああああああああああ！！」

すぐ隣にいたよ。

良く見たらこの鎧、落書きされてるし、表面のメッキがはがれてる。遊園地側もちゃんと直しとけよ。

次は何もない空間に出た。

しかしよく見ると、壁の下のほうが布だ。たぶん、手が出てきて、足をつかむんだろうな。

俺の読みは当たった。予想通り、手が出てきて俺とミクの足をつかんだ。

「キヤアアアアアアアア！」「いつてえええええええ！」

「おいっ！つめ刺さってる！」

俺が叫ぶと、あせったように手が引っ込んだ。

そんなこんなで、ミクの悲鳴を聞きながらも、お化け屋敷の出口に着いた。

「…終わったの？」「終わったぞ。」

「…ま…まあまあだったわね。まあ、あたしからすれば、大したことなかったけどねっ！」

さっきまで怖がっていた奴が何言ってるやがる。

と言いたかったが、殴られそうなので、言うのはやめておくことにした。

さて、乗ってないアトラクションはあと…

観覧車だけか…

「ミク！観覧車に乗るぞ！」俺はミクの手を引く。

「えっ！？ちよっとっ！」

運のいい事に、観覧車の入り口には、行列がなかった。俺たちは入口に着き、パスポートを見せた。

そして観覧車に乗った。

観覧車はゆっくりと上にあがっていく。

「綺麗だな。」「えっ！？（あたしが！？）」「夕日。」

俺がミクのほつを向くと目の前にはこぶしを握ったミクがいた。

「ガッ！」「痛ってえ…！俺、何か悪いことしたか？」

「死ねっ！」

よくわからんがとりあえず謝るところ。「ごめん。」

「死ねっ！」「ごめん。何でもするからさ。」「何でも…？」

「ああ！なんでもする！」

「じゃあ、目、つぶってなさいよ！あたしがいいって言っただけに開けたら殺すから。」

「分かった。」俺は言われるがままに目を閉じた。

2秒ほど経つと、俺の唇に何か当たった。マオや涼華とキスした時の様なそんな感覚だった。

キスをした時のような……?!?!?その時、俺は目を開けてしまった。

目の前に俺にキスをしてるミクが映っていた。

マオは俺が目を開けてるのに気付くと、あわてて唇を離し、顔を真っ赤にした。

「しっ……死ねええええー!!!!!!」

ミクの叫び声と同じタイミングでドアが開いた。下に着いたようだ。従業員が鳩が豆鉄砲を喰ったような顔をしてる。

「すみません。」「俺たちは従業員に一礼をして遊園地を出た。

「楽しかったな。」「死ねっ!」「ミクはどうだった?」「死ねっ!」

「また来ような。」「死ねっ!」

会話になってねえよ。『死ねっ!』としか返事が返って来ねえよ。

「……さようなら。」「ミクが誰にも聞こえないような声で言う。」「なんか言ったか?」

「死ねっ!」「何で!?!」

まあ、ミクはミクで楽しめたみたいだからいいか。

翌朝、ミクの姿はなかった。

二つの世界を繋ぐ道

真っ白な空間に俺とミクが向き合って立っている。

「信次。」「何だ?」「…バイバイ。」「え!?!」

ミクの目からは涙が流れていた。ミクはどんどん遠のいて行く。

「ちょっと待てよ!どうということなんだ?ミク!?!」

「つく!つはあ。夢か…。」俺は部屋を見渡した。マオが幸せそうに寝ている。

そこにはミクの姿はなかった。

「あいつ、先に起きて下で飯食ってんのか?」

ミクの布団の上に置き手紙が置いてあるのに気付いたのはしばらく後だった。

ミクは地図と歩いてしている場所を照らし合わせて歩いていた。そしてある場所で止まった。

使用されていない空き地だ。

「おお、ミク。意外に早かったなあ。」「そう言ったのは、木ノ原美樹だった。」

「…。」「ミクは何も言わない。」

「ミク。もう思い残すことはないねんな?」

「うん…。美樹姉さん。」

「母さん、ミクがどこに行ったか知らないか?」俺はパンを食べながら聞いた。

「そついえば、5時ぐらいに起きてきて、お義母様今までありがとうございました。」

って言って出て行ったけど……。」

「え？…今、なんて…。」「だから、今までありがとうございまして。って…何でかしら？」

「信次さん、部屋にこんな紙が落ちてましたよお。」

マオが目をこすりながら、二階から下りてくる。マオの手には一枚の髪が握ってあった。

「信次、マオ、お義母さまへ

今までありがとう。あたしは、異世界に帰ることになりました。

実は、この世界に来る前に、美樹姉さんと約束をしていました。

この世界で、一週間以内に信次の許嫁にならないと、異世界に帰るという約束を。

だからみんなとはもう会えません。

さよならを直接言うのは恥ずかしいから手紙に書きました。

この家で過ごしたことは一生忘れません。

木ノ原ミクより」

「これって…あいつ！…マオ！探しに行くぞ！」「はい！」

「クソッ。ここもない！」波雪の家やあげはの家にも行ってみたいけどミクはいない。

俺が見ついたのは公園だった。「クソ。ここもないのか。」

「ここは…空き地か。」

俺が空き地を除くとミクと木ノ原美樹が紺色の穴に吸い込まれていくのが見えた。

「ミク！」「信次！？」時はすでに遅かった。

俺の言葉もむなしく、紺色の穴はふさがれた。

俺はマオに電話をかける。

「トウルルルルル…ガチャッ、はい。」

「マオか？ミクは異世界に帰ってしまった。」

「え？」「どうして…どうして俺はあいつを止められなかったんだ…クソッ！」

「信次さん…。」「マオ、お前は未来に帰ったりしないよな。」

「はい。」「未来…そうか！マオ！」

空き地に来てくれお前に頼みたいことがある！お前にしかできないことなんだ！」

「はい。…？」

「ミク。もう思い残すことはないねんな？」

「うん…。美樹姉さん。」「待てよ。ミク！」

「信次！？」「どういうことだよ。この手紙！」

「約束してたのよ…。」「約束？そんなもん関係ねえ！お前はここに居ろ！」

「関係なくないっ！あんたには分かんないでしょうけど姉さんは私の命の恩人なの！」

「命の恩人？」「姉さんは、捨てられたあたしを拾ってくれたの！」

「…。」「姉さんは、私にあんたとは違う人とあたしを結婚させた

がってたのっ！

でも、あたしは断ったっ！好きな人がいるって言ったっ！
だから姉さんはあたしに一週間チャンスを与えたっ！

ミクの目からは涙が流れていた。

「でも、あたしはチャンスを手にする事は出来なかった。
姉さんの期待にこたえることが出来なかった。

だから私は姉さんの勧めてくれた人と結婚するのよっ！」

「自分の運命くらい自分で決めろよ！」

「え！？」「自分の運命は人に決めてもらうもんじゃねえだろ！

それは本当にお前が望んだ運命なのか！？違うだろ！

お前は自分の運命を決められないから姉さんに決めてもらってるだけだ！

お前は、姉さんに甘えてるだけなんだよ！違うか！？
もう一度言っ！それは本当にお前が望んだ運命なのか！？」

「あたしが望んだ運命はあんたと結婚すること、でも…」「でもじゃねえ！」「」

「俺はお前と一緒に居たいんだよ！お前にどこかに行ってほしくないんだよ！

だから…頼むから行かないでくれよ！」「…。」

「ミク。」口を開いたのは木ノ原美樹だった。

「信次って言う奴の言う通りやで。嫌なことは嫌って言ってええんやで。」

「姉さん…。」「分かった！期間を無制限にしたるわ。」「

「姉さん…いいの？」「でも、その男が何かやらしい事でもしたらいつでも戻つといでや。」「

「信次、やらしいから、すぐそつちに帰っちゃうかも。」「

「俺、ミクにやらしいことしたことないと思うんだが…。」「

「ほな！」「そう言つて木ノ原美樹は紺色の穴に吸い込まれていった。

「信次、なんであたしの居場所がわかったの？」「マオ！出てこい！」「

扉に隠れていたマオが出てくる。

「一回、マオが異世界に帰っちゃうところを見たんだ。

でも、マオに頼んで時間を戻してもらったんだ。」「

「ありがとう、マオっ！」「そんな大したことはないですよあ。」「

マオが照れるように笑う。

「じゃあ帰るか。」「オー！」「」

「（信次、ありがとう。）」

二つの世界を繋ぐ道（後書き）

良い話っぽく仕上げました

三人目の居候

俺の部屋に、『バリッバリッ』っという音が響き渡る。

居候どもがお菓子を食っているのだ。

「ちよつとマオ！それあたしがお皿に置いてたやつでしょっ！」

「だってさつきミクだって取ったじゃないですか！」

「まあ喧嘩はよしなさい、ボンクラども、そのお菓子を私によこすのです。」

平和だな。

居候三人がお菓子の…ちよつと待て、三人？

「ちよつと待て、お前は誰だ！？」

「私のことか？私は、宇治川ユウうじかわなのです。」

宇治川ユウと名乗る白髪の、ちっこい少女が口にポテトチップスをめいいっぱいに入れて喋っている。

「食いながら喋るな。」「お前が私に指図する権限など与えた覚えはないのです！」

また変なのが来た。

「いつから、この部屋に来たんだ！？」「つい、二分前なのです。」

「お前は何でここに？」「よくぞ聞いてくれたのです。私はマオの監視役としてきたのです！」

「マオ、こいつ知ってるか？」「いえ？」「よし、どこかに行け不審者。」

「不審者とは何事かあ！不審者はお前のほうなのです！」

「信次が不審者って言うのはあたしも賛成ね。」

「ミクも納得してるんじゃないかねえ、おい！」

「リア充は爆発しろ。」「どこからともなく一閃の声がつ！」
「というわけで私がこの家を拠点にしてやることで話は終わったところだ。」
「待てい！どこからその話は出てきたんだ！？」「私の口からです！」
「はあ…。もう溜息しか出ねえよ。」
「まあ、冗談はここまでにして…。マオの監視役って言うのはホントのことです！」
「でも、こんな人知りませんよ？」「当り前です！マオより後の時代に来たのですから！」
「それで、その監視役さんが何でマオより小さいガキなんだ？」
「ガキじゃないのです！監視役じゃなくてユウと呼ぶのです！愚か者！」
「（随分と口の悪いガキだな。）それで、ユウとやら…。何で俺の家に居候するんだ？」
「そりゃ勿論、家がないからなのです！」ユウは威張って言う。
「それ、威張って言うことじゃないだろ。」
「…何、空気にしてくれてんのよっ！あたしの台詞この回一個しかないじゃないっ！」
「すまん、すまん。」「何、その心のこもってない謝り方はっ！」
「そうです！正座して、頭を床に、にじりつけるようにして謝るのです！」

こうして俺の家に居候が増えました。

プール開き（前書き）

前の回で来た、ユウはあくまでもサブヒロインです。
少し月日は飛びまして、今は6月後半です。

業も自由ってことだ。

つまり…遊び放題ってやつだ。

みんなが自由に行動してる中、波雪と一閃とミクとマオと涼華はビーチボールで遊んでいた。

俺とあげはは影で休んでいる。というよりあげはが一人にならないように見てやっっている。

あげはは泳げないのだ。それは昔からのことだから、波雪も一閃も分かってくれてる。

だから、俺と波雪と一閃は、毎回交代で、あげはのを見てやってる。

それで今日は俺の番ってわけ。

「信次…。みんなと遊ばなくていいの…?」「いや、別に。」

「信次は私のこと心配して、ここにいてくれてるんでしょ?」

「まあそうだけど、こうして二人でいられるのも久しぶりだからさ、あげはと話しておきたいって言うか、何て言うか。」

「じゃあ信次、修学旅行の一日目の夜言ったこと覚えてる?あれの返事を聞きたいの!」

「つつつ!…分かったちゃんと答えるよ。俺はあげはのことが好きだ。」

「えっ…!?!」「でも、友達としてだ。」「…。じゃあ、誰が好きなの…?」

「別に今は恋愛対象として『好き』とかいう感情は誰にも抱いてない。」

「だけど、もしかしたら誰かを好きになるかもしれない。」

「それは、マオかもしれないし、ミクにかもしれないし、涼華かもしれない。」

「もちろんあげはかもしれない。だから今は答えが出せないんだ。」

「でもあげはのことは、『友達として』だけど好きだ。それは分かっ
ておいてほしい。」

「…。分かった…。私、信次に好きになってもらうように頑張る…。」

「じゃあ、泳ぎの練習でもするか!」「うん…!」

転校生？

7月9日、いつも通り、ミクとまおとあげはと一閃と波雪と涼華と一緒に学校に向かっていた。

俺はふと思ったことを声に出した。

「この人数って、登校するには多くないか？」

「おおかた大方、誰かさん目当てだろ。」

「誰かさんって誰だ？」「リア充は爆発しろ。」

「最近、一閃の台詞ってそれしかないよな。」

俺が苦笑しながら、ふと、前を見ると、少し髪にくせのある短髪の男子がうちの制服を着て歩いていった。

その男の腕には、骨折した時につけるギプスがつけてあった。

「波雪、あんな奴うちの学校に居たっけ？」

「見ねえ顔だな。生徒会長のほうが知ってると思うが。」

「なあ、涼華。あんな奴うちの学校に居たっけ？」

「うーん。見覚えがないわね。」「じゃああいつは誰だ？」

俺たちが教室につくと、担任が入ってきて朝礼が始まる。

「えーっと、今日はみんなにサプライズがあります。」

その言葉に反応してクラス中がざわめく。

「静粛に。今日はなんと転校生がうちのクラスに来ました。」

一閃が手をあげて、「男ですか？女ですか？」と聞く。

「男の子よ。残念でした。」

担任の一声と同時に男子のテンションは盛り下がり、女子が盛り上がった。

そして、一閃はすすり泣き始めた。

「この時期に転校なんて怪しいわね。きっと何か裏があるわ。」

どこからともなく、平綾ボイスが！？涼宮ハヒ！？

「すすり泣いてる小奢君は置いて転校生入場〜！」

その声と同時に前の扉が開いた。

そして転校生らしき人物が入ってきた瞬間、女子と一部の男子がにぎわった。

「なかなかイケメンじゃない？」「あいつって、甲子園の…。」

「じゃあ自己紹介をお願いします。」「三梨田^{みなした}零^{れい}。」

登校中に見た男がそこにいた。

「じゃあ三梨田君は、倉肩君の後ろの席ね。」「よろしくな。三梨田。」「…。」

何だ？感じ悪いな。

そして、朝礼が終わると、野球部の男子三人が、三梨田のほうに集まる。

「お前つてまさか甲子園準優勝校のエースの三梨田か？」「…。」

「なあ、うちの学校の野球部に来ねえか？」「…。」

「その怪我が治ってからでいいからさ。」「…。入る気はねえ。」

「何だよ連れねー奴。」「自分の才能におぼれてんじゃねえぞ。」

「今、何って言った？テメエ、もう一回行ってみる。」

「おや、聞こえちゃったかな、三梨田君？」

もう一回行つてやるよ。自分の才能におぼれてんじゃねえぞ。」

「ガッ！」教室内に鈍い音が響き渡る。

「痛つてえ。俺を殴りやがったこいつ！」

怪我人^{けがにん}だからって俺が手加減するとも思ってたのか！？このナルシストが！」

三人が三梨田に襲いかかる。

「いい度胸だ！覚悟は出来てんだらうなあ！」

三梨田の目の色が変わった。

俺や波雪が止めに入る前に決着はついた。三梨田の前には三人が倒

れこんでいた。

三梨田は全員の攻撃を華麗にかわし、一人ずつ顔にストレートを入れて、喧嘩を終わらせた。

しばらくすると先生が来て、三梨田と、野球部の三人を連れて行った。

連れて行かれるまでの間、三梨田はじつとしたまま、虚ろな目で棒立ちだった。

「なあ、信次。」波雪が俺に話しかけてきた。

「何だ?」「何で、甲子園準優勝校のエースがこんな学校に来たんだろうな?」

「そういえばそうだな。少し気になるな。」「調べてみるか。」

放課後、俺は波雪とファミレスにいた。

「信次。三梨田の前の学校に問い合わせてみたら、三梨田の奴、前の学校で、

野球部の三年を全員半殺しにして、退学になってるらしい。」

「それとあいつの骨折は関係あるのか?」

「分からない。でも、三梨田が骨折した日と野球部の三年を半殺しにした日が

ちょうど一か月離れている。」

「こうなったらあいつに直接聞くか。」

「えっ!?一週間謹慎!?」俺と波雪は担任に聞いたです。

「まあ、初日から問題を起こしちゃったからね。」

「信次。」「ああ。」「三梨田の住所を教えてください。」

三梨田視点…

「ピンポン。」「だれか来やがったな、担任か?」

「ガチャッ。」扉を開けた俺がバカだった。

「よっ!」「すまん、急にお邪魔して。」同じクラスの倉肩と越後…だっけ?

「何だ?連絡なら手短に済ませろ。」

「前の学校の野球部のことなんだが。」「帰れ。」

「すまないが、お前のこと調べさせてもらった。」倉肩が言った。

信次視点…

「どこまで調べやがったんだ?」

「前の学校の野球部の奴らを半殺しにしたところまでだ。」

「あっそ。じゃあな…。」三梨田がドアを閉めようとしたので、ドアを抑えて俺はこう言った。

「その事件と、骨折と、うちのクラスの野球部が言ったことは関係あるのか?」

「アア!?!」やはり、何か関係あるみたいだな。

「とりあえず中で話をさせてくれないか?」

「どこまで図々しいんだお前ら。」

「信濃 弘。」

その言葉を言ったのは波雪だった。俺は何の事だか分からなかったが、

その言葉を聞いた三梨田の様子はおかしかった。

「つてめえ!どこでその名前を聞いた!?!」

「中で話そうじゃないか。ここで話すと近所の人に聞こえるぞ。」

「チイツ!入れ!」そういつて三梨田は俺たち二人を家に招き入れ

た。

転校生？

「で、どこで『信濃』の名前を聞いた!？」

三梨田の目は殺気が満ちていた。

「お前の前の学校の校長先生からだ。」「勝手なこととしてくれてんじゃねえぞ。」

「すまん。」「で、信濃のことはどこまで聞いたんだ？」

「お前が、野球部の連中を半殺しにした時、その『信濃』って奴だけ異様なぐらい重症だったつてところまでだ。」

「じゃあ、それ以上は俺の過去のことを調べんじゃねえぞ。」

「そついうわけにはいかねえんだよ。」「アア!？何だ!？」

「俺はお前と友達になりたいんだ。」

「…てんじゃねえ。」「え?」

「ふざけてんじゃねえぞ!俺は友達なんてものはいらねえんだ!これ以上俺にかかわんな!」

その言葉を言った三梨田の顔は、怒りつつもどこかに悲壮感^{ひそつかん}を隠している顔をしていた。

「友達なんていらぬ?…どういうことだ?」俺が問うと、「…黙れ!黙れ!黙れ黙れ黙れ!!!」

明らかに三梨田の様子がおかしかった。

「お前、何か友達のこと何かあったのか?」五月蠅い!何だよ!お前から出て行けよ!」

「お前の心の救いになりてえんだ!話を聞かせてくれよ。」

「一緒にねえかよ!信濃と同じこと言っつてんじゃねえぞ!」

「(『信濃』って奴と何かあったせいでこんな状態になつてるみた

いだな。」波雪が小声で言った。

「（どうする？今は引くか？）」「（いや、俺に考えがある。）」「

「（それはどんな作戦なんだ？）」「

「（とりあえず、三梨田にはれないように信次の携帯で俺の携帯に電話をかけてくれ。）」「

「（分かった。でもなぜ？）」「（説明してる時間はない。）」「

俺は作戦通りに三梨田にはれないようにポケットの中で波雪の携帯に電話をかけた。

「prrrrrrrr!」

「ちよつとすまんが電話に出てくる。」「そのまま帰れ。」「

波雪が部屋から出て行ったことにより、三梨田と俺で二人きりになつてしまった。…気まずい。

「さつき越後と何を話してたんだ？」

「『信濃』つて奴がどんな奴か、お前に聞くか聞かないか相談してたんだ。」「

「お前に教える気はない。」「じゃあ聞かないことにしておく。」「

「チツ！食えねえ野郎だ。」「

しばらくの沈黙が続いた。その沈黙を破つたのは波雪だった。

「失礼したな。さて、話の続きをしようか。」「お前らに話すことは何もない。」「

「じゃあ、俺から話すことはあるけどその前にお前に話したい奴がいるってさ。」「

俺！？俺、何にも考えてないんだけど！

「倉肩か？」「信濃だ。」「…それ以上俺の前でその言葉を口にするな。」「

「そういつても、電話が信濃とつながってるぞ。」「切れ！」「

「じゃあ交渉だ。電話に出るか、お前の事件のことを俺たちに教えるか、どっちか選べ。」「

「どっちにしる俺は損するじゃねえか！」「選べ。」「

「分かった。電話を切れ。」「OK!」そう言って波雪は、電話の

相手に何か言って、電話を閉じた。

「事件の話はどこまで聞きたいんだ?」「全部。」
「チツ!…まずは、信濃の話だ。」

〜回想〜

高校に入ったはいいいけど、どいつもこいつもいけ好かない野郎ばつかな。

「やあ、はじめまして。」「何の用だ?お前。」「僕かい?僕は信濃弘。」

「名前は聞いてない。何の用だと聞いてるんだ。」「友達にならないかい?」

「友達なんてなろうと言ってるもんじゃなくて、いつの間にかなってるもんじゃねえか?」

「じゃあ友達になってくれるんだね。」「おお。」

変な奴だな。こいつ何考えてるんだ?

「零、お昼ご飯買いに行かないかい?」「零って何だ?」「君の名前だろ?」

「そうじゃなくて、何で零って呼ぶようになった?」「駄目かい?」

「いや駄目ってことは無いけど…」「じゃあ、いいじゃん。」「お…おお。」

いつの間にか俺と信濃は親友と呼べる仲になっていた。そして部活動見学の日になった。

「零はどこに入るんだい?」「俺は野球部だな。全国中学校野球大会のMVPだったからな。」

「へー!じゃあ僕も野球部に入ってみようかな!?」

「入ってみろよ、やってみると面白いもんだぞ。」
「分かったよ。じゃあいつしよに入部届けを出しに行こうよ。」
「おう！」

ここから俺の歯車は狂いだした。

三梨田の過去

俺たち二人は、入部届けを出して、野球部に入部した。

俺は、中学校MVPだったから監督に特別視されて、入部早々から、エースをやらされた。

俺は監督に特別視されるのが嫌だった。だから監督にこう言っ
てやっ
た。

「俺をベンチから外してください。外さないとその部活をやめます。」

言っていることがおかしいのは分かっていた。

『自分からベンチを外れたがる奴なんて馬鹿だ。』と思っていた。
でも俺は仲間と一緒に楽しく野球をしたかった。『そのためなら馬鹿でもいい。』そう思っていた。

だが、仲間から送られてくる言葉は『何でレギュラー抜けたんだよ！』という言葉だった。

信濃は何も言わなかった。

みんな俺を応援してくれていた。なのに俺は期待にこたえられなかった。

そして、仲間の口から吐かれた言葉は…

「自分が上手いってところを俺たちに見せつけに来たんだろ。」

「違う。お前らと楽しく野球がしたかっただけで…。」

「お前は楽しいかもしれないけど、俺たちは何にも楽しく無いんだよ。」

「お前、野球やめろよ。」

「な…!？」「おつと手は出さないでくれよ。先輩が大会に出られなくなるかもしれないだろ。」

「こ…こいつ…。」「じゃあ俺は帰るよ。明日までにやめてくれて
いると嬉しいかな。」

その日からみんなの目線は冷ややかになった。俺の名前を使つて恐喝。俺の家の電話には非通知で、『野球やめろ』と、

直接手は出してこなかったが、嫌がらせが続いた。

そして俺は、野球を辞めずに二年になり、春の甲子園では優勝した。

そして夏の甲子園にも出場した。俺たちは決勝まで勝ち続けた。そして決勝の前日の練習後、

俺が部室で着替えていると背後からバットが俺目掛けて垂直に降ろされた。

俺は、当たる直前に気付いて体を右にそらした。

「ボキッ！！」

鈍い音がぶしつに鳴り響く。避けるのが遅くて利き腕の左腕にあたったのだ。

俺がとっさに後ろを振り向くとそこにバットを持って立っていたのは、信濃だった。

そして信濃の後ろにもレギュラーメンバーがいた。

「なに避けてんだよ。」

感情のこもっていない冷たい声だった。

「お前何を…痛ッ…。」

殴られた右腕が痛む。

「見たらわかるよね。」「くっそお！！！」

俺は殴りかかった。

「この人数に勝てるんでも…又ア！！！」

「お前ら、俺が嫌いなら面と向かって嫌いって言えよ！」

「ああ…お前が嫌いだ！」

親友と呼んでいた奴の口から吐かれた言葉は冷たいものだった。

「自分の才能におぼれてんじゃねえぞ。」

親友と呼んでいた奴との思い出が頭によぎる。

「……………ウ…ウアアアアアアアア！…！！！」

気がつく俺は職員室にいた。

「目が覚めたか。」

先生が喋りかけてきた。

「あれ…野球部の奴らは…？」

夢だったのか、良かった…。

「お前が全員病院送りにしたぞ。」「…え！？」

夢じゃ…無かったのか？

「残念なことだが…お前が転校処置という形になってしまった。」

「わかった…。」「え…お前は転校という結果でいいのか？今なら
弁解もできるぞ。」

「いいんだ、先生。」

～回想終了～

「そして今ここにいてるってわけだ。」

「今の話聞いてどうだった『信濃』とやら。」

『すまないな、零。』「お前まだ電話を切ってなかったのか？」

「三梨田。信濃と話してやってくれ。」「チイツ！…もしもし。」

『お前に言いたいことがあるんだ。ごめん。』「口だけなら何とで

もいえるだろ。」

『そうだね。でもこの言葉は口だけの言葉じゃないんだ。』

「あっそ。」『こっちに帰ってこないか？みんな反省してるんだ。』

「戻る気はねえよ。」『何で？』

「こっちで友達が出来たからだよ。」『そっか、じゃあ暇があったら遊びに来てよ。』

「ああ。じゃあな。」「プツッ。」

「さてもう時間もきたし、帰れ帰れ。」「最後に一ついいか？」
俺と波雪が言った。

「友達になるうぜ。」

「友達なんてなるうと言ってるもんじゃなくて、いつの間にかなってるもんじゃねえか？」

「そつだな。」

三梨田の過去（後書き）

実はこの回は作者が本当にあつた実話（一部変更あり）をモチ
ーフにしています。

それにしてもあいつ、許せねえ…。

どうしてもむしゃくしゃしてしまつたので…。

でも、おかげですっきりしました。

ちなみに作者は仲直りをしていません。

失礼しました。

旅行記？

「信次、あたし、いきたい。」「信次…。」

「信次さん、私、もう、我慢できません。」

「ボンクラ、早くいかせるのです。」

「駄目だ！」「なんで？信次。」「駄目だと言ったら駄目だ。」「お願い、信次…。」

「いかせてください。」「そうです。早くするのです。そして私たちをいかせるのです。」

「…」「旅行に！」「…」「…」

ついに俺たちの学校も夏休みに差し掛かりました。

「駄目だ！」「良いじゃねえか行かせてやれよ。」「波雪が言った。

「あのな、波雪、俺の負担額はお前の4倍なの。」「

「じゃあ私の別荘来る？」

「涼華、どこから入ってきたんだ？」「窓。」「

「さらっと怖いこと言った気がしたんだが。」「

「まあその話は置いて、私の別荘ならいつでも行けるけど。」「

「これが、新園グループの力か。」「

「そっか、じゃあ別荘行きましょう。」「いつ？」「今。」「

というわけにいま、へりに乗っています。

「何で俺も乗せられてるんだ？」三梨田、改め、零が言う。

この前、下の名前で呼び合おうと約束したからだ。

「たくさんで言ったほうが楽しみじゃない。」涼華が言う。

「チツ！いけ好かねえ。」「そういえば、行き先はどこですか？」

「ラブホテ「わーわーわーわー！！！！」」

「会長…。ホント…？」「あげはも真に受けるな！」

「でも一閃だけは勘弁ね。」「そうですね。」

「そうなのです。分かっているではないですか。マオ、ミク。」

うちの居候三人が一閃を痛めつけている。

「どうせ俺なんか、どうせ俺なんか、どうせ俺なんか、どうせ俺なんか…」

「一閃、今のはこいつらの軽い冗談だ。」「本当か！？」

「多分。」おれは目を逸らす。そして一閃はすすり泣き始めた。

「それで、私も来てよかったの？」久々の登場だが、妹の芦菜だ。

「うん大丈夫よ。でも。」「でも？」「重量オーバーかも。」

「え？」「あら、高度が下がってきてるわね。」涼華が窓の外を見

ながら言った。

「え？え？」「落ちてるわねー。」「なんで涼華はそんな冷静なんだ？」

「何ででしょうか？」「ちょ…え？」

機体はどんどん下降して言うてる。

「お…落ちるだろ！何でみんなそんな冷静なんだよ！」

「だって。」「ミクがそう言った時、飛行機が着陸する。」

「ここが別荘でしょ。」「…え？」

騙されてたのは俺だけみたいだった。

…とりあえず、涼華の別荘につきました。

旅行記？

涼華の別荘は海に囲まれた綺麗なところだった。

涼華の別荘の中は想像よりも広かった。執事も数十人いた。

「閃がメイドを見て喜んでいたのは見なかったことにしておこう。」

「じゃあ、荷物は梧桐さんに渡しといて部屋の確認をしましょうか。」

「涼華が言つと、「梧桐ってやつはこの白髪のじじいか？」

零が、近くにいた白髪のじじい…じゃなくて執事を指差して言った。

「そうよ。」「じゃあおっさん持つてっくれ。」

「かしこまりました。」そう言つて梧桐さんが、手を叩いて執事を数人ほど呼んで俺達の荷物を持つて行った。

「じゃあ私達の部屋は…」

「ミク—マオ—ユウ—芦菜—梧桐—あげは—

廊下

「—閃—波雪—信次—涼華—零—

という配置になった。

「異議あり！」「異議ありです！」「異議あり…。」「異議ありな
のです。ボンクラ！」

「あら何かしら？」「何で会長だけが女性陣で唯一信次の隣なんで
すかっ!？」

「あら、信次の隣が良かったのかしらミクちゃん。」「べ…別にそ

ういうわけじゃ……。」

「私は信次さんの隣が良いです。」「じゃあこれでいいのかしら?。」

— ミク — — ユウ — 芦菜 — 梧桐 — あげは —

廊下

— 閃 — 波雪 — 信次 — マオ — 零 —

— — — — 涼華 — — — —

「つておい！涼華！なんで俺の部屋なんだ!？」

「それはおかしいでしょうが！ボンクラ!」

「それじゃなくて、こういうのはどうかな?」芦菜が言って配置を変えた。

— ミク — マオ — ユウ — 芦菜 — あげは — 梧桐 —

廊下

— 閃 — 波雪 — 信次 — 涼華 — 零 —

「いや、この配置もダメだろ！俺と涼華が一緒なのも変わってないし!!!」

そして壁を勝手に取るな!」

「じゃあこういうのは?」 — 閃が配置を変える。

— その他の男共 —

廊下

――閃&女の子――

「おいおい。」「あたしはこれでもいいけど。」「芦菜が言った。
」「」「」「却下!」「」「」「
」「ガーン。そうだよ俺は嫌われ者だよ。そうだよ、そうだよ。」「
最近、一閃がかわいそうに見えてきたのは俺だけだろうか？

そして最終的にこういう配置になった。

――ミク――マオ――ユウ――芦菜――涼華――あげは――

廊下

――閃――波雪――信次――梧桐――零――

「じゃあ、海に出ましようか。」「そうするか。」「
」「やつほーう。」「一閃のテンションが異常に高いのは気のせいだと
思っておこう。

「じゃあ、女子更衣室は会談の右下で男子更衣室は左下よ。
そして、私と信次はここで一緒に着替えるわ。」「

あれ、俺の聞き間違いだろうか？

「さて、会長着替えに行きましようか!」「ミクが涼華を引っ張って
いく。

「俺らも着替えるか。」波雪の提案に俺たち三人は賛成した。

「お待たせ、信次っ。」ミクが青い水着を着て、走ってきた。いつも水泳で見ているスク水もかわいいがこっちのほうが断然かわい。

「かわいいじゃん。」俺が言うと、ミクは顔を真っ赤にして、「な…なによ…あ…え…ゴニョゴニョ。」照れてるみたいだな。信次さあん。」マオとユウが来た。

「あ…あんまりじろじろ見るな。このボンクラが！」
あまり水着とかに興味のない俺が少し興奮してる。そういえば久々の目の保養だな。

「信次、一閃が鼻血の海におぼれてるぞ。」「ほっとけ。」

「信次…。」あげはに肩を叩かれる。その隣には涼華もいる。似合ってる…?」「うん。似合ってるぞ。」

そういえば、あげはを見てやる当番を決めてなかったな。

「私にはノーコメントなのね。」「あ、うん、涼華もかわいいぞ。」
「ん ありがとう」

「信次…。行っていいよ…。」あげはに言われる。
今、俺とあげはがパラスルの下で涼んでいる。

「大丈夫だって、俺もあんまり肌焼きたくないし。」
もちろん嘘だ。

「いいよ、そんなに気を遣わなくて…。」
「気を遣ってるんじゃないかって本当に良いんだぞ。俺のことは気にすんな。」

明日になったら一閃と変わってもらえるからさ。」
「いや、行って。私、信次が楽しんでいるのを見てるだけで楽しいか

ら。」

「分かった。じゃあみんなと楽しんでくるよ。」

「信次、私、先に帰っておくね。」「ああ。」

「美間坂あげは様。」「何ですか…?」「私の名前はご存知でしょうか?」

「梧桐さんでしたっけ?」「そうです。」

「ちょっとした余興につきあってもらえますでしょうか?」

「余興…?」「はい。」「それは、信次を楽しませれるものなの…?」

「はい。」「じゃあ手伝います…。」

その瞬間、一瞬だけだが梧桐さんが邪悪な笑みを浮かべた。

俺たちが別荘に帰るとあげはの姿はなかった。

旅行記 ？（前書き）

前回の部屋割の図、修正しました。

旅行記？

「あげはー？どこだー？」「信次、あげはの部屋にもいなかったぞ。」

波雪が言う。

「まあ周りが海だから、別荘の外に出ることは無いだろ。」

「周りが海ってやばくないか？溺れてたりしてたら…。」

「あげは！」「」

俺と波雪が急いで別荘を飛び出ようとしたところで、

「その心配はありません。」

梧桐さんに止められた。

「なんでそんなことが言えるんだ？」

波雪がタメ口で言う。

「『寝巻を忘れたので取りに帰る…。』とおっしゃってましたがので、

うちのものにヘリコプターを操縦させて、美間坂様をご自宅まで送

りました。」

「わかった。」

俺が言った後に波雪が小声で、

「でも何かおかしくないか？」「何がだ？」

波雪が小声で言ったのに合わせて俺も小声で答える。

「あげはは何で俺たちに帰るといふことを伝えなかつたんだ？」

「梧桐さんに伝えればそれでいいと思つたんじゃないのか？」

「でもあのおっさん、何か隠してる気がするんだ。」

「まあ、大丈夫だろ。」「本当に大丈夫だと良いが…。」

「そろそろ晩御飯にしましょうか。」

そう言ったのは涼華だった。

「まだ六時半だぞ。」俺が男子とU Oをしながら涼華に言った。

「イベントをやるうと思うから早めにご飯を食べとこうと思っ
てね。」

「イベント?」「何をするんだ?」「零が口をはさむ。

「ふふつ。ひ・み・つ。」涼華が悪戯いたずらに笑う。

「そういえば、ミクとユウがまだだな。」

俺が言った。その時、

「何をするのですこのボンクラ! 離すのです!」「あなたはあの
という声が聞こえた。

「ユウ! ミク!」

俺と波雪と涼華と一閃が急いで、二人の部屋に向かうと、二人の姿
は無く窓が開いていた。

さらに、

「キャアアア!」「そういうことか! あんたが犯人! ぐっ!」

マオと零の声が聞こえた。

食卓に戻ると、2人の姿は無かった。

「なっ…。」「嘘だろ…。」

「みんな落ち着いて。」涼華が俺たちに声をかける。

「二組に分かれてみんなを探しましょう。」

そして、涼華の指示で俺と涼華、

波雪と一閃の二組に分かれて消えた奴らを探すことになった。

「みんなどこ行ったんだ?」「どこかしら。」

その瞬間、

「なるほど。あんたの作戦だったのか。」「うおあああ!」

二人の音が響く。

「信次、あたし怖い。」涼華がおびえた表情をしている。
さすがの涼華でもこれは怖いのか。

残ったのは俺たち二人だけ。みんな無事なのか？

「！！？」

ちよつと待てよ…。さっきから梧桐さんがいないよな…。

なるほど。分かったぞ！この事件の犯人！

犯人は梧桐さんと…あいつだ！

旅行記 ？（後書き）

「ダンタリアンの書架」一話見たけど・・・
何とも微妙な仕上がりでした。原作は、かなり面白いんですがねえ。
とりあえず、2話に期待します。

旅行記 ?

「分かったぞ。犯人は梧桐さんと…」

涼華…お前だ！」

「さすが信次ね。お見事、正解よ。」「何でこんなことをしたんだ？」

「余興よ。せつかくの肝試しのイベントだったのに。」

「そうだったのか！」「失礼しました。」梧桐さんが廊下を歩いてきた。

「今頃皆様は隠し部屋にいますか。」「隠し部屋つてのがあったのか。」

「じゃあ私たちも隠し部屋に向かいましょうか。」「おうっ！」

梧桐さんの部屋に入って、タンスをずらすと隠し扉があった。

扉を開けると、みんながトランプをしていた。

「やっと終わったのですか。これだからボンクラは。」

「信次…。会いたかった…。」「信次さん、一緒にトランプしましょうよ。」

「『ババ抜き』やるから信次が配りなさいっ！」

「はいはい。」

午後11時になってみんな、おの各々の部屋に帰っていった。

俺も部屋に帰ると人の気配がした。それも一人や二人ではない。

「お前ら俺の部屋で何してるんだ？」「待ち伏せ…。」

「あげは、今さらって怖いこと言ったよな。」「あら…ばれちゃっ

た。」

「涼華もいたのか。」「まだばれてないわよ、マオ。」「そうですね、ミク。」

「ばれてるぞ。」「押入れを開けるとマオとミクがいた。」

「出て行け。」

俺は女子を部屋から出て行かせた。

「ふう……。さて…寝るか……。」「俺は部屋のかぎを閉めて布団に潜り込んだ。」

「何か忘れてる気がするけど…まあいいか……。」

ユウ視点…

ふっふっふ…ばれてないみたいですね。

私は天井裏に隠れていたのです。とりあえず降りるのです。

「ガコッ！」

へ…？

「きゃっ！」

「ドシン！」

「ゴハッ！」

しまったのです！ボンクラの上に落ちてしまったのです。どこかに隠れないと…。

信次視点…

「いってえ。何だ？急に腹の上になんか落ちてきたぞ。」

俺の腹の上には天井に張ってあったはずの板があった。

「これが落ちてきたのか…。」

俺は板を天井にはめなおして、また布団をかぶる。

ユウ視点…

ばれなかったみたいですね。今がチャンスなのです。今のうちにこのボンクラの顔にキスを…そしてついでに落書きをしてやるのです。

私はボンクラの上に馬乗りになって、サインペンのキャップを開けたのです。

信次視点…

あれ？でもあの板つてあんなに重くなかったよな…。

まさか部屋に誰がいるのか？俺があわてて起きあがると

ユウの顔が目の前に…え…？これ…唇くちびると唇くちびるが触れてないか？

「な…な… #&%?@!¥????」

「どうしたユウ!?」ユウが顔を真っ赤にして気絶した。

「…とりあえず、部屋に返しといてやるか。」

俺はユウを部屋に返した。

「これが学校の奴らに知れ渡つたら俺、ロリコンって言われるよな。

…うあああああああああ!?!?!」

こつして一日目の夜は更ふけていった。

旅行記 ？（前書き）

そういえば、芦菜の出番、無いですね。

旅行記 ?

「う…む…ん？」俺が目を覚ますと同時に、見えたのはあげはだった。

「おはよう…。」「おはよう。…何で俺の部屋にいるんだ？鍵しまつてただろ？」

「ピッキング…。」「それって犯罪だぞ！」

「ピッキングというのは嘘で窓をガスバーナーで…。」「

「それも犯罪だぞ。」「…というのは冗談で信次に会いたかったから…。」「

「お前はだれかに会いたいと思ったただけでその人のところに行けるのか？」

「習得するのに3年かかった…。」「…後で俺にもその方法を教えてくれ！」

「…というのは嘘で、梧桐さんにマスターキーをもらって、信次を起こしに来ようと…。」「

「…そうなのか。ありがとな、あげは。」「信次、朝食を食べにいこ…。」「

「おう、分かった。」「俺たちは食堂に向かった。

食堂に行くと、もう全員揃っていた。どうやら俺が最後だったようだ。

「遅いです。信次さん。」「…あんたのせいでみんな待ってるんだからっ—」

ミクとマオの声が飛んでくる。いつもならここでユウが遅いのです。ボンクラ！いつまで待たせるのですか！

と叫ぶところだけど、今日は叫ばないな。

ハッ…。まさか昨日のこと気にしてるんじゃない…。

「遅効性睡眠薬（じせきせいすいみんやく）の効果がでてきたみたいね…。」
そう、さつき信次に食べさせた料理にこの睡眠薬を仕込んでおいたの…。

これではらくは信次は私のもの…。

信次視点…

「うっ…ここ…ここは？」俺の部屋と同じ構造の部屋だけど、仄（ほの）かにいい香りがする。

どうやら女子の部屋のようだ。そしてその部屋にある椅子に俺は縄で縛りつけられている。

「信次、起きた…？」「あげは？」「信次、私のこと好きになってくれた…？」

「まだ決めてないんだ。とりあえず、俺を縛ってる縄をほどいてくれ。」

「信次が私のことを好きになってくる呪文をかけるから待って…。」

「ん…。」「あげはの唇と俺の唇が重なる。

あげはは頬（ほお）を赤らめながら、俺を縛っている縄をほどく。

「信次…。私のこと…好きになった…？」「…前よりは…まあ。」
こんなことを言っている俺の顔も多分真っ赤だと思う。

「信次、私本気だから…。信次が好きになってくれるまで、諦めないから…！」

あげはが真っ赤な顔で言った。どこか、悲しそうな顔をしながら…。

旅行記 ？ (前書き)

終盤に向けて頑張ります。

旅行記 ?

「そういえば今日、クソ兄貴の誕生日だよな。」

「そう、今日、7月22日は、俺の誕生日。」

「……えっ?」「……」

あげは以外の女子が驚愕の表情を見せている。

あげはは昔から知っていたからあまり反応はしていない。

「信次さん、何で教えてくれなかったんですか?」

「信次、言ってくれたらプレゼントとか用意するのに何で言わないのよっ!」

「どこまでこのボンクラは融通が利かないのですか。」

「信次、プレゼントはキスでいいかしら?」

「涼華はいらぬことを言わないでいい。」

まあ言っただけじゃあ俺も悪いしな。

「プレゼントはいらねえよ。第一、プレゼントは男が渡すもんじゃないか?」

「ま…まあそうですけど…」「確かにそうね…」

「じゃあ、プレゼントを私たちに渡すのです!ボンクラ!」

「なんでそうなるんだよ。」「ケチね、信次。」

「何で俺がケチ呼ばわりされるんだよ。」

誕生日とかにはちゃんとお前らにプレゼントしてやるからさ!」

「約束ですよ!」

「信次、ちょっとあたしの部屋に来てくれない?」「ミクと廊下ですれ違った時に止められた。」

「おお…でも何でだ?」「いいから来なさいよ。」

そう言っただけでミクの部屋に引張られて連れて行かれた。

部屋に入ると同時に、ミクにベットに押し倒された。

「ねえ信次。あたしと今からすぐ結婚しなさい。」「今すぐ?」

「あんた18歳になったんだから結婚してもいいでしょ?」

「そうだけどさ...」。「信次、あたしは本気であんたのことが好きなの!」

「...それは...」。「俺の口はふさがれた。ミクの唇によって...」。

「ねえ、信次わかる?あたしこんなにドキドキしてるの。」

ミクの胸の鼓動が俺に伝わってくる。

「あたしのが好きだったらあたしと一緒に異世界に来なさい。」

「今はまだ決められないんだ...」。「今決めてよ!美樹姉さんは『いつまでも待つ』」

「って言ってくれたけどあんまり心配をかけるわけにはいかないの。」

俺は誰のことが好きなんだ?そう考えると思い浮かんでくるのは一人だった。

それは...

旅行記 ？（後書き）

『ミクルートEND』または『マオルートEND』にお進みください。

ミクルートEND

それは…ミクだった。俺はミクのが好きなのか？

俺は…そうだ、俺は…

「俺はミクのが好きだ。」

「信次、ホントに？」

「ああ、でも今からじゃなくてもいいだろ？母さんに了承も得てないしさ。」

「でも…大丈夫だ。他の奴に何か言われても俺の心は揺らがないから。」

「ホントに？」「ああ！」

そして俺は2カ月後、ミクと結婚をした。

結婚式にはマオの姿は無かった。

結婚式の前日にこんな置き手紙があった。

『ミクと信次さんへ

今までありがとうございます。

私の分も幸せになってください。』

という二言ふたことだけの手紙が…。

その手紙は、少し濡れた跡があった。涙の雫が落ちたような跡が。

「信次、動いてるわ。」「もうすぐ生まれるのか…。」

「名前は何にしましょうか？」

「そつだな…男の子だったら『信吾』で女の子だったら『実』にしよう。」

「何で？」「俺の、実の両親の名前だよ。」

「そつなんだ。じゃあそつするわね。」

ミクルートEND（後書き）

ミクルートENDです。

マオルートENDもよかったら読んでください。

マオルートEND(前書き)

『旅行記 ？』を読んでからこの回を読んでください。

マオルートEND

それは…マオだった。最初のあった当時から俺はマオのことがかわいいと思っていた。

そしてこうした日々を過ごしていくうちに、マオのことを好きになつていった。

「ミク…。すまない…。」「信次が好きなのって…マオなの？」
俺は小さく頷いた。ミクは少し黙ってこう言った。

「…わかった。じゃあ今からマオにプロポーズしてきなさい！」

「えっ？」「さっさとする！マオに取られるならあたしも納得いくから。」

「…わかった。言ってくる！」そう言っただ俺はマオの部屋に向かった。

ミク視点…

「納得いくわけなんて無いじゃない。」

でも、信次がマオのことを好きなんだったら仕方ないよね。

「あ…れ？おかしいな…。眼から…涙が…信次…。」

「

信次視点…

ミクは俺のこと、本気で好きだった。でも俺はそれを断った。

俺がミクの満足のいくような結果を出さないと

俺にふられたミクが可哀想だ。

だから、ミク。俺は絶対にマオへのプロポーズを成功させてやる。

俺はマオの部屋のドアを勢いよく開けた。

「信次さんどうかしましたか？」

「マオ…俺は十八歳になって結婚できる歳になったから…」

結婚しよう!」

「へ…え…ええー!?!?ホ…ホントですか?」

「俺は本気だ。」「え…あ…はい!そのプロポーズ受けます!」

「良かったじゃん、信次。…バイバイ。」

どこからともなくミクの声が聞こえた。

その後、ミクを探してみてもどこにもいなかった。

「パパー。」「どうした?ミク。」

「あたしで大きくなったらパパのお嫁さんになるの。」「そうか、ミク。」

この幼い子供は、俺の娘の倉肩ミク。

名前は…俺を本気で愛してくれた人の名前をつけた。

マオルートEND（後書き）

そのうち、番外編で『あげはルートEND』と『ユウルートEND』と

『涼華ルートEND』を書こうかと思っています。

今まで読んでいただき、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6377t/>

未来 + 異世界 + 俺 = 結婚

2011年7月23日22時31分発行